

2012.8.18

生誕100年の 名指揮者たち その1 ヴァントとザンデルリンク

プログラム

1912年は名指揮者の当たり年と言われています。名前を上げるとグンター・ヴァント、クルト・ザンデルリンク、セルジュ・チェリビダッケ、ゲオルク・ショルティ、イーゴリ・マルケヴィチ、フェルディナント・ライトナー、シャンドール・ヴェーグ、山田一雄等が並びます。そこで今回は、今年生誕100年を迎えるこれらの名指揮者たちの演奏をお聴き頂くことにしました。第1回目はヴァントとザンデルリンクです。

グンター・ヴァント（1912～2002）はドイツのエルバーフェルト生まれ。ヴァントが光り輝くようになったのは1982年に北ドイツ放送響の音楽監督になって以降のことで、それまで存在感の薄かったヴァントが1990年この手兵オーケストラとの来日公演で演奏したブルックナーの交響曲第8番の名演が話題となり、一躍注目の的となりました。2000年最後の来日公演では伝説的とも言われる名演を残し、多くの音楽ファンの尊敬を集める存在になりました。年輪を重ねながら熟成して行ったヴァントの芸術は、揺るぎのない確信に満ち溢れ、輝かしさとスケール感を持ち合わせた味わい深いものでした。

クルト・ザンデルリンク（1912～2011）はドイツ東プロイセンのアリス生まれ。ナチスを嫌ってソヴィエトに亡命し、ムラヴィンスキーの元でレニングラード・フィルの第一指揮者。1960年には東ドイツに帰国し、ベルリン交響楽団の芸術監督となり、このオーケストラの黄金時代を築き上げます。その後はフィルハーモニア管弦楽団の首席客演指揮者を経てフリーとなり、世界各国のオーケストラを指揮して引退する2002年まで、指揮界の巨匠として君臨しました。ザンデルリンクは1973年のドレスデン・シュターツカペレとの来日公演をはじめ、シベリウスやショスタコーヴィチ等の録音で、それなりの名声は得ていましたが、最後までメジャー・レーベルでの録音が少なく、実力の割には評価が低かったようです。ザンデルリンクの演奏は常に落ち着いたバランスを保ちながら、内に秘めた溢れんばかりの情感と格調の高い豊かな響きを引き出す、実に魅力的な指揮者でした。

今日は二人の名匠が残したライブ録音の中から選りすぐりの演奏をお聴きください。

フランツ・シューベルト (1797～1828): 交響曲第7番口短調“未完成”

グンター・ヴァント指揮北ドイツ放送交響楽団
(2000.11.14 東京オペラシティ・コンサートホールでのLive)

アントン・ブルックナー (1824～1896): 交響曲第5番変ロ長調 ～ 第4楽章

グンター・ヴァント指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1996.1.12 ベルリン、フィルハーモニーホールでのLive)

*** 休憩 ***

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (1756～1791): ピアノ協奏曲第24番ハ短調K.491 ～ 第1楽章、第2楽章から、第3楽章から ラドウ・ルプー (ピアノ)

クルト・ザンデルリンク指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1992.6.7 ベルリン、フィルハーモニーホールでのLive)

ジャン・シベリウス (1865～1957): 交響曲第2番ニ長調Op.43 ～ 第1、第2楽章から、第3楽章、第4楽章

クルト・ザンデルリンク指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(2000.6.17 ベルリン、フィルハーモニーホールでのLive)